宮城県から私にあたえられたもの

南部中・1　海野　心桜

今年の五月頃、私は大好きな漫画の聖地巡りを理由に、愛知県から十時間かけ、宮城県に行ってきました。

大好きな漫画の聖地に行けてものすごく楽しく観光しましたし、宮城県といえばの牛タンや、ずんだシェイクなどを食べて、飲みました。とても楽しい時間でした。

私達家族は、弾丸ツアーなことが多く、宮城県に行くのも前日に決まったことだったため、ホテルなども取らず、車中泊をしました。私達が泊まった辺りは車の中からでも海の音が聞こえます。夏になりかけていた時期だったので真夏のような暑さはありませんでしたし、北海道に近いため暖かい上着がなければ寒いくらいでした。

それに辺りには街灯が一本や二本立っているだけで携帯などの光が無ければ何も見えませんでした。寝る前にトイレに行こうと思い寒い中、外に出ました。

外は真っ暗と言えるほどで、はっきりとは見えませんでしたが、とても開けた土地で、その日は、そのまま車に戻り朝を迎えました。

車の中で目を覚ますと、朝、釣りに来ていた地元の方と父が話す声が聞こえました。父は、この開けた土地に違和感を覚え、地元の人に話しかけているようでした。

「ここら辺の土地って、すごく開けていますけど、何かの建物でも立てる予定があるんですかね。」

「ああ、ここはね、全部津波で流されちゃってね。とくに立てる予定はないと思うよ昔ここには、防風林が海に沿って生えていたんだけどね……。」

「全部流されちゃったよ。」

「えっ。そうなんですか。いつの津波なんですか。」

「えっと……。」

私は二人の会話を聞き、とても驚きました。会話を聞いていると、昔ここはとても沢山の家が建っていた所だったそうです。その数、約二千軒。私はその言葉を聞いて理解できませんでした。

なぜなら、ここの開けた土地は、学校の何百倍もありそうな土地だったからです。

ここに家があったということは、人々が居て家庭もあったはずです。それが一瞬のうちに津波によって無くなってしまう……。とても想像できませんでした。

まだ布団の中で寝っ転がっていた私は起き上がり何気なく車の外を見てみました。

すると、夜は暗くて見えなかった物がはっきり見えました。車の目の前には、家と言えるかわからない、ぼろぼろの建物がありました。外壁が崩れ落ち、家のトイレなどが剥き出しになった光景が広がっています。ショックとは言えない、何かの気持ちが湧いてきました。

他の土地は家の跡も無く、あるのは津波で流され残った木の根だけでした。

車から少し離れた場所にも痕跡高があり、そこには十七メートルと書いてあります。

一家屋なんて一瞬で飲み込まれてしまう高さでした。

せっかくここに来たなら海の方へ行くことにしました。海に着くまでに大きな堤防がありました。堤防の前には墓誌があり、地震の被害で亡くなった人々の名前と年齢が書かれてあり、そこには、まだ幼い子供達の名前が沢山ありました。

まだ、産まれて間もない二歳の子供達の名前、まだ世界のことなどを何も知らない未来があった子供達だったはずです。被災者の想

像もできないぐらいの悲しみが伝わってきた気がしました。
　母が私に言ってくれました。
「私は明日にでも死ぬかもしれない。」
それに私は笑って返しましたが、それは本当のことです。今の私には、母が亡くなった時のことなんて想像が出来ません。でも、私より幼い子供達のことを想うと、本当に、母の言ったとおりです。あそこにあった子供達は私よりも世界を知りません。それなのに急に来た津波で亡くなってしまった。
　母が言いました。
「誰にも死ぬ時のことなんて予知できない。」
母の言うとおりです。予知できていたら墓誌に書かれていた人々は亡くなりませんでした。
　私は生きる、ということについて学びました。
　私自身、昔嫌なことが山ほどありました。これから先も嫌なことはあるでしょう。でも、それは本当に一瞬の事です。ただその辛いことを乗り越えられるかが大切なのです。
　毎日生きられることは奇跡です。
　私は墓誌に書いてあった二歳の子供達の六倍近く生きています。今まで十二歳になるまでの時間は当たり前に過ぎていった時間でしたが、すべてが奇跡の集まりなのです。
　私にとって奇跡とは、自分の望んだタイミングでくる幸せのことだと、前までは思っていました。今の私は奇跡とは、自分でつくるもので、今まで積んできたものだと考えます。
　みんなは奇跡と聞いて神様が与えてくれたもの、などと言うかもしれません。ですが、私はそうは思いません。
　私は幼い頃から良い行いをしたら絶対に返ってくると言われてきました。私はその返ってくる良いことというのが奇跡なのではないかと思います。
　そして、今、私は思います。
　奇跡とは運命とも呼べるものではないでしょうか。親友がいる、話せる時間も奇跡で運命なのです。
　学ぶ場も、安全に暮らせる家も私にはあります。
　生きられるって、とても幸せなことです。無駄のない人生を生きるのは、無理かもしれません。それでも、悔いのない人生で、奇跡と運命を大切にしたいです。

７・９